

新 おおさか KEYわーど 【第6回】

買い物にでもいきまへんか これも大阪、あれも大阪、大大阪時代のチラシ

個人的に集めてきた大正末から昭和初期のチラシを『大正昭和レトロチラシ 商業デザインにみる大大阪』（青幻舎、本年6月発行）にまとめた。印刷屋が保存していたチラシ見本のかたまりが古書店に出たものである。手前味噌ながら、この本は、近代大阪を知るための基礎資料集だ。すぐゴミ箱に捨てられ消滅するチラシだが、時代ごとの街を知る上では興味深い。

たとえば、商店街のチラシによくある「誓文払い」はバーゲンのことで、陰暦十月（10～12月）に開催され、心齋橋筋商店街でも通りに大きく「誓文払い」の看板をかかげた。そうした当時の商習慣がチラシから実感できる。デザインにはアールデコあり、元禄文化風ありで楽しいが、宣伝文句、キャッチコピーも大阪らしく、たくましい商魂にあふれている。面白いと思う一枚が、「皮靴の時代は去った」という「増田商店」のファイバー靴のチラシである（表紙）。

ファイバーとは新開発のガラス繊維のことで、それを用いた靴も軽くて耐久性に優れた。現代ならば頑丈なキャリアバッグというところだろう。しかし、チラシでは、紳士が客車から「イクラ投げテモ大丈夫」と、ぼんぼん旅行カバンをホームに投げている。カバンは大丈夫でも、中でお土産は砕け散っていないかと心配だ。自転車の荷台用ポテ箱を「命知らずのファイバーポテ」と呼ぶのも過激だ。ポテは張りぼての略称だが、自転車にポテ箱を積んで荷物を運んだ。命知らずはポテか、自転車の店員のどちらなのか。ポテならば頑丈で壊れないという意味だが、店員が命知らずで、無茶なスピードで走らないかが気にかかる。

靴店の「天華洋行」も強烈だ。「不景気ヲブツ飛バス犠牲大奉仕」（図1）とあるチラシの顔は第31代米国大統領フーバーで、「今やフーバー景気時代 来たらんとす!!」と煽る。「靴一足お買上げの方に履換靴洩れなく進呈」と豪語するのも、フーバーの選挙スローガン「どの鍋にも鶏一羽を、どのガレージにも車二台を!」を受けたのだろうか。しかし、

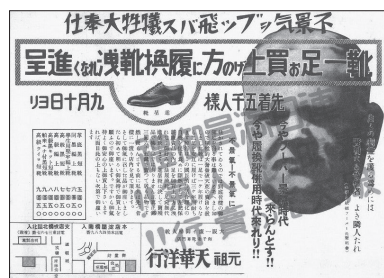


図1 「不景気ヲブツ飛バス」として米国大統領フーバーに期待したが…

フーバー就任から半年後の昭和4(1929)年、世界恐慌に突入する。そのとき、履き替え靴のプレゼントはどようになったらう。

インパクトでは選挙チラシも凄い。昔のド

板選挙、候補者や運動員が有権者に会うため民家の前の側溝を塞ぐ板を渡り支持を訴えることだ。政策よりも、浄瑠璃が浪花節のように情に訴える。区会議員候補者のチラシは次のような調子である。

「いよいよ明日! 最後のお願ひ、最後の一矢まで放ちました。最後の一兵まで動員しました。肉弾、丘弾戦って戦って戦いぬきました。倭壯、悲壯、実に苦しい戦いをつゞけて来ました。ただ この上のお願ひは、乞う最後の一瞬! 阿部を救へ! この涙あるお言葉をお聞かせ下さい。そして絶大なる御同情を垂れ賜へ。連日の悪戦この苦闘を最後の栄冠に依て彩って下さるよふ、切に切にお願ひ申し上げます」。

「尖端」という言葉もよく登場する。鰻まむし(鰻井)が25銭の、「いづもや」のチラシには「滋養の尖端」「出前は超特急」とある。エログロナンセンスの時代らしくカフェーも「尖端」が好きで、「断然!! 文化の尖端を走る麗人の決死的サービス」(「キャバレー日本橋」、図2)、「昔堅気のおやぢ滅ぶ 新時代の尖端を行く女将の軟派サービス」(「カフェーイチロウ」)などがある。



図2 「文化の尖端を走る麗人の決死的サービス」とはこのダンスか。恋のキャバレー日本橋

和風を意識した千日前の「カフェー忠臣蔵」のチラシなどからは、「夫婦善哉」に登場する下寺町市電停留所前の「サロン蝶柳」も音楽に新内、端唄などを流す日本趣味の店であり、こんな時代の嗜好を織田作之助は小説にしたのかなと思えてくる。文芸作品に描かれた“時代”が、具体的に視覚化できるのもチラシの効用だろう。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現像―』（創元社）など。